同朋大學佛教文化研究所報

第35号

発行日　令和四年三月三十一日
編集・発行　同朋大学佛教文化研究所
代表者　安藤　弥
〒四五三-八五四〇
名古屋市中村区稲葉地町七の一
TEL〈〇五二〉四一一-一三七三
FAX〈〇五二〉四一一-一三六九
e-mail : bc-inst@doho.ac.jp
（題字は池田勇諦元学長）

# 研究所の調査と収集史資料

研究顧問　蒲池　勢至

研究所に関わって四〇年近く、あっという間に歳月が過ぎ去った。この三月末に同朋大学（大学院特任教授）を退職するにあたって、研究所での仕事、とりわけ調査と収集した史資料について少し述べておきたい。

私が研究所に深く関わるようになったのは、一九八四年に専任研究員（研究所助手）に就いてからであった。仕事始めは河野門徒の真宗寺院調査と『名古屋別院史』編纂からであったが、継続して行ったのは初期真宗遺跡寺院の調査と収集した史資料の整理であった。毎年、七月末から八月初め、もしくは九月の上旬に二泊三日の予定で関東の親鸞聖人遺跡寺院へ出かけていた。東北の福島・仙台・花巻、甲信越の長野・山梨・新潟、中国地方の岡山・広島方面へも出かけている。

一日目は午前が移動・午後から一か寺、二日目は二か寺、三日は午前一か寺、午後が史跡踏査である。いまから考えると、かなり強行軍であったと思う。調査計画を立てて調査許可を申請し、機材を準備して事前に送っていた。16㎜マイクロフィルムの撮影機を分解し、ジュラルミンケースに入れて持ち歩いていた。参加者は六、七名、所長であった織田顕信先生が御住職とお話しながら史料の所在を確認、他の者は法宝物の掛け軸などを写真撮影と採寸、文書史料はマイクロ撮影と調書記録である。限られた時間の中で、とにかく所蔵寺院に関わるものはできるだけ多く収集するのが方針であった。

あらかじめ法宝物については調べていたが、それでも思わぬものが出てきて興味深かったことが何度もある。水戸の善重寺や稲田の西念寺では、当時知られていなかった恵信尼公の肖像画が出てきたときは驚いた。光明本尊や先徳連坐像なども何点か確認できた。研究所紀要七・八合併号（一九八六年）の「真宗初期遺跡寺院資料の研究」は、第一次報告書としての成果であった。まだ『真宗重宝聚英』が刊行される前のことである。

調査は楽しかった。しかし、一九九二年に研究所が同朋学園から大学に移管されると予算も人も削減され、調査も思うようにできなくなった。私も二年後に専任を辞して「客員所員」になっている。その後も真宗寺院の調査はなんとか継続され、現在、デジタル撮影以前のネガ・スライド・マイクロフィルムの資料が概算で三〇万点も蓄積されている。調査した寺院は六〇〇余りに及んでいる。今後、収集してきた資料の保存とデジタル化をなんとか進めていただきたい。非常に多くの調査費用と人的労力で収集してきた、貴重な研究所の知的財産である。そして、これを活用して研究が展開されることを念じるばかりである。

研究所は楽しい研究の場であった。人が集まり、分からないことがあると誰かが教えてくれる。自由に語り合って刺激を受け、意見を求め合うサロンであった。故織田顕信先生、小山正文先生、故渡邉信和さん、小島惠昭さん、青木馨さん等々、「仲間」がいたから研究できたと思う。研究上の「御同行・御同朋」であった。

# 〔書評〕◎青木馨著『私が生まれてきた訳は―中村久子の声を聞く―』（法藏館、二〇二一年）

飯田　真宏

はじめに
Ⅰ　中村久子
一、悲母観世音菩薩像
二、中村久子という人
1　四肢切断から独り立ちへ
2　四婚の家族生活
3　障害を乗り越えた女性たちとの値遇
4　仏縁
Ⅱ　蓮成寺の法縁
一、一枚のはがき
二、幼い頃の思い出―微かな記憶をたどる―
Ⅲ　中村久子法話「生かさるゝ仕合せ」（抄）
一、讃題―西条八十　詠「ほほえみ」―
二、私はいつも新婚旅行
Ⅳ　一通の手紙―尼さんの眼病を治してあげたい―
一、遺された手紙
二、花山勝信との出遇い
Ⅴ　宿業のままに―詠歌三首―
一、歌に託されたこころ
二、慈光を求めて
あとがき

この文章を読んでいる方の中、その多くは中村久子という人物をご存知のことだろう。病気によって四肢を失い計り知れない問題に突き当たるも、その障害を乗り越えて懸命に生きる姿は様々な書物やテレビなどでも紹介され、数多くの人に生きる力を与えてきた。ただ本書は、読者が「中村久子に出遇うため」ではなく、「中村久子が出遇った〝真実〟に出遇うため」に世に出されたものだろう。

著者の青木馨氏は、中村久子は「妙好人」であり「信仰の人」だと言う。しかしそれは、自分とは一線を隔てる〝お手本〟のような人物ということではない。青木氏は本書で「真実の宗教は真に人を救う、という言葉では表現しきれない境地を示していかれた」と述べているが、その言葉通り、本書のCDに録音された中村久子の肉声からは、一貫して〝念仏の教えに出遇え〟という願いが響いてくる。絶妙な間を取りながら、聞き取りやすい言葉で、そして何よりとても力強い声で紡がれる法話。そこからは、どこまでも中村久子の依り所となった、換言すれば、中村久子をして中村久子たらしめた念仏の教え（久子が確かに出遇った真実）が現れてくる。

また、本書で語られる、中村久子と様々な人々との交流も大変興味深い。障害を乗り越えた多くの女性や信仰に生きる念仏者との関わり合い、また青木氏の御父上である青木順正氏に宛てられた久子の手紙など、多くの方々との値遇によって、中村久子の信仰が確かなものとなったことは窺える。そうして確かなものとなった信仰はまた他者へと響いていく。

私自身、特に興味を惹かれたのは、まだ子どもだった時分の青木氏と中村久子との出遇いが語られる場面。自分の腕先を少年である青木氏に触らせる久子、その当時の事を思い出しながら青木氏は「両手足がなくて気の毒な方という感じは全くなかった。むしろ不思議な人だというような印象だった。不自由な身でありながら、不自由さを感じさせることのない方だったからだろう」と述べる。中村久子の肉声はもちろんのこと、こういった思い出を聞くことを通して、読者はより身近に中村久子

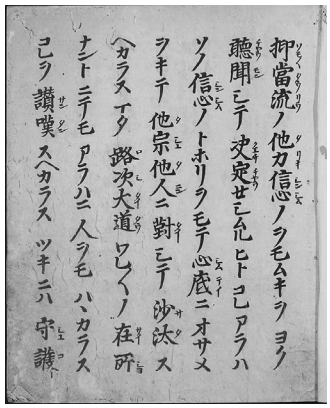
を、確かに生きていた念仏者の存在を感じられるのではないだろうか。『歎異抄』でも説かれるように、念仏の教えは「よきひと」を通してのみ伝わるものである。決して、自分の思いだけで掴むことなどできないものである。中村久子の生涯、肉声、姿などを通して、読者は久子が出遇ったものが確かな〝真実〟であったことを知ることができるだろう。

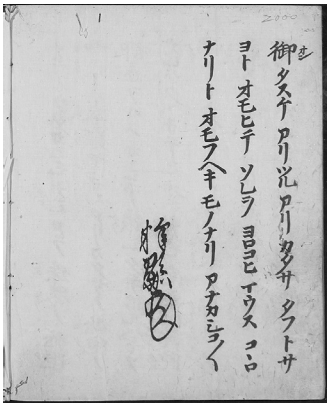
なお、本書は二〇一九年に出版された『A級戦犯者の遺言―教誨師・花山信勝が聞いたお念仏―』（法藏館）の姉妹版である。どちらも、真実の教えを依り所として生き抜いた念仏者の声を未来に届けんとする、青木氏の願いによって貫かれたものであることを最後に付け加えておく。

## 〔研究所新収史料について〕

◎顕如判御文 一冊（袋綴）縦二六・八cm×横二二・二cm　墨付三九丁

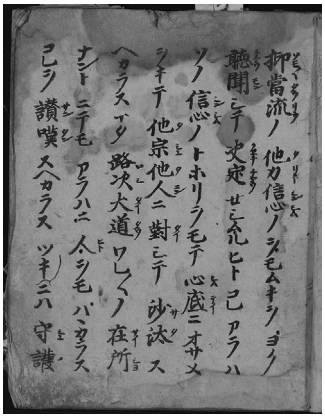
末尾に「釈顕如（花押）」とあり、本願寺十一世顕如（一五四三―九二）が証判する御文（蓮如が著した消息形式の仮名法語）で、冒頭に『五帖御文』の二帖目第六通、四帖目第十二通の二通、その後は五帖目の全二二通を収める内容である。

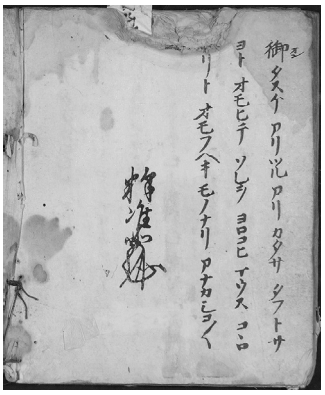




◎准如判御文 一冊（袋綴）縦二六・九cm×横二二・一cm　墨付三九丁

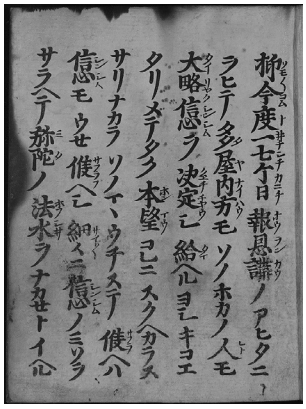
末尾に「釈准如（花押）」とあり、西本願寺十二世准如（一五七七―一六三一）が証判する御文で、冒頭に『五帖御文』の二帖目第六通、四帖目第十二通の二通、その後は五帖目の全二二通を収める内容である。状態はやや悪い（ヤブレ）。

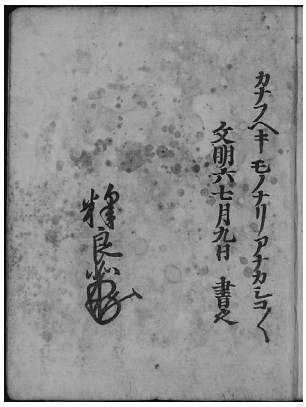




◎良如判御文 一冊（袋綴）縦二六・九cm×横二二・四cm　墨付五〇丁

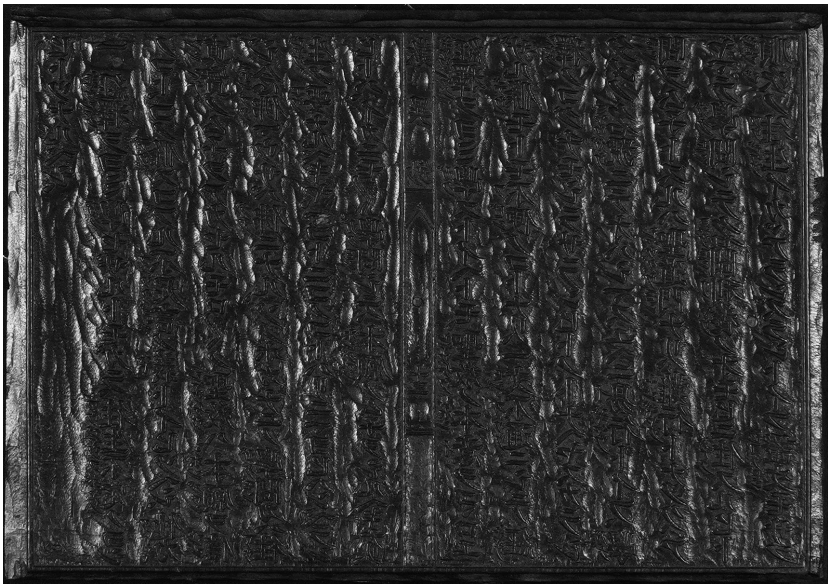
末尾に「釈良如（花押）」とあり、西本願寺十三世良如（一六一三―六二）が証判する『五帖御文』第二帖である。状態はやや悪い（湿り・カビ）。



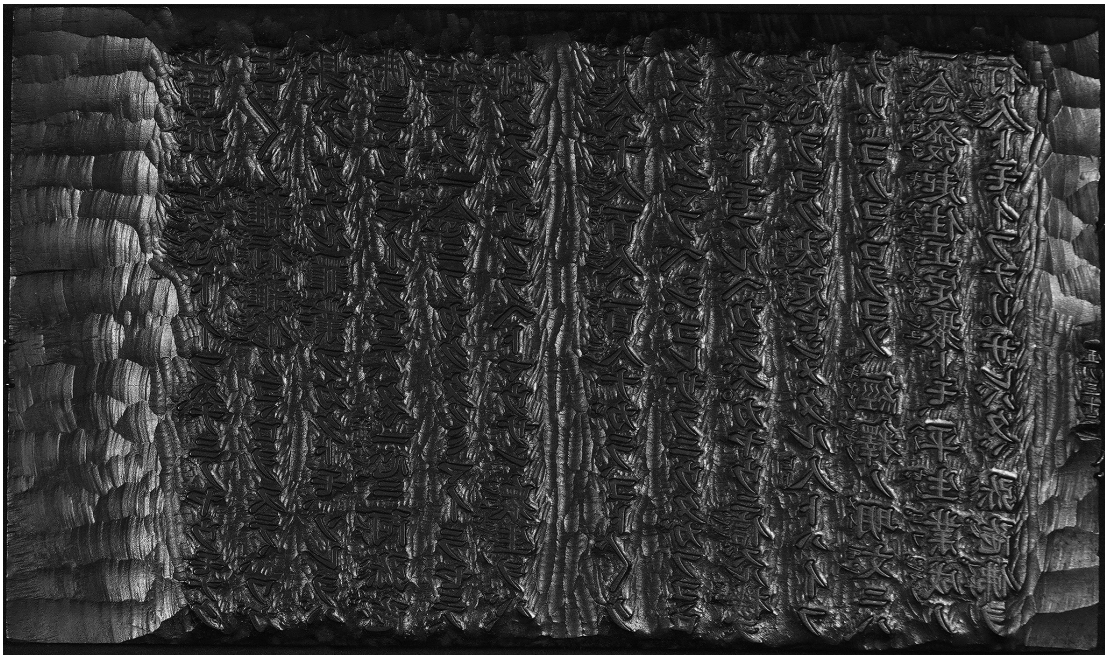


◎真宗聖教（歎異鈔・御文）版木　合計一三枚

近世後期～明治期のものとみられる貴重な真宗聖教の版木。『歎異鈔』の十二～十四、十六～十八、二十～二十三、三十（計一一枚）、『御文』五の三十二・三を入手。『歎異鈔　十三』は縦一五・七cm×横二二・五cm×厚二・四cm、『御文　五の三十二』は縦二三・九cm×四一・九cm×厚二・一cmの規模で、いずれも材質は山桜とみられる。



版木『歎異鈔　十三』（第11通末・第12通頭）



版木『御文　五の三十二』（５帖目第21通）

《研究会活動報告》

## アジア仏教研究会

武田　龍

開催日：1／17　2／21　3／23
参加者：玉井　威・武田龍・蒲池勢至

新型コロナウイルスの蔓延による混乱のために中断した研究会を再開し、法華経を読み進める。

大乗仏教興起の事情は、未だわからないことが多い。目下の関心事は、大乗経典を制作した人々や大乗の論師といわれる人たちと仏教サンガの主流との関係である。

インド仏教では、経蔵の内容は阿含である。大乗経典を経蔵の内容とするサンガが存在したという報告はない。僧は阿含を学習して仏説を学んだのである。

如来所説（tathāgatena vutta）の仏語（buddhavacana）が仏の教え（buddhasasana）であった。仏説は師の指導としてまず個人の記憶の中に保存され、次の段階でサンガの記憶となった。仏滅直後に行われた第一結集は、各自が記憶していた師の指導を確認して、サンガの記憶へと移す手続きであった。簡潔にまとめられて記憶されていた師の言葉は、たとえ相互に記憶の齟齬があっても、それは個人への指導として尊重されたようである。しかし簡潔なるがゆえに、個人の事情を離れれば理解するには説明が必要になる。その必要が聖典の成立を促した。言葉の説明や解釈が付加され、初心者にもわかるように説法の由縁や法座の様子なども描写された。すると聖典は長文化する。記憶しやすく暗誦するに便利な文学形式が採用され、形式により聖典は分類整理された。いくつかの部派が分立する頃には、サンガは聖典の言葉を尊重するあまり、言葉に捉われて仏説の真意を見失いがちになったようである。

その弊を克服すべく、或る人たちは新しい経典を作り仏説の真意を明らかにしようと試みた。これが大乗経典である。主流派は一顧だにしなかったようである。

## アジア仏教研究会分科会

玉井　威

今年度（令和三年度）は、長引くコロナのため、何度も休止を余儀なくされたが、令和三年十月から研究会活動を再開した。

分科会では「ミリンダ王の問い」を読み進めてきたが、その内容が、次第に当時のパーリ仏教教団内で問題となったやや些末な問題に、終始するきらいになってきたので、一旦これを休止し、その代わり、仏教を専門とされていない参加者のために、仏教（パーリ仏教）の教義をわかりやすく書かれた論文（カルナダーサ氏の論文）を読み進めることにした。翌十一月からは、キリスト教に造詣の深い新メンバーが加わったので、この方式が功を奏することとなった。

年あけて二月からは、この方式でやりつつ、再びテキスト「ミリンダ王の問い」に戻ることにした。次回、読もうとしているところには、仏法（正法）の存続と滅尽の問題が扱われている。そこには仏教の教義の普遍性（超歴史性）と、かたやその歴史性（時代性）との相克、矛盾が論じられているのである。後の正像末の三時史観との関連性とか、出来事の一回性（Einmaligkeit）が前提となり、歴史とは切り離せないキリスト教の教義との比較も興味深いテーマとなると思われる。

## 真宗史研究会

安藤　弥

今年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第四四回）

【日時】八月五日（木）一四時～一六時

【報告者】小泉義博氏

【題目】「本願寺顕如に関する偽文書」

第二回目（通算第四五回）

【日時】二〇二二年二月三日（木）一五時～一七時

【報告者】芹口真結子氏（岐阜大学地域科学部助教）

【題目】「地域社会における宗名論争の影響
―京都の宅替手続きを素材に―」

小泉氏は、戦国時代の本願寺第十一代顕如に関する文書群において、偽文書がかなり見受けられるとし、各文書における筆跡や花押の形態、文章表現の特徴、特に石山合戦期を中心とする時代背景などをめぐる考察を一つ一つ提示した。また、現所蔵に至る伝来経緯に疑問符がつく文書があるとも指摘した。

芹口氏は、江戸時代後期の「宗名論争」（東西本願寺等が「一向宗」ではなく「浄土真宗」の公称を主張し、それに浄土宗が反対して起こった事件）の影響が、特に京都の宅替手続きという場面において、どのように表れたかについて検討した。関与する諸方の認識の相違もあり混乱状況が生じたことを実証的に提示した。

いずれもコロナ状況下で、第一回目は対面、第二回目は初めてオンラインで実施した。次年度も引き続き二回程度、もしくはそれ以上の研究会活動を予定している。

## 「東アジア仏教思想史」研究会

市野　智行

開催日：8／18・19　12／28・29　3／10・11

メンバー：市野智行・織田顕祐・藤村潔・川口淳・黒田浩明

二〇二一年度は、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響を受けざるを得なかった。しかし本研究会では、開催形式を一度に二日間、午前・午後（全日）の日程に変更することで、年間通して開催日数は少ないものの集中的に実りある研究会を開催することができた。

研究会の持ち方は、曇鸞の『無量寿経優婆提舎願生偈註』（以下、『浄土論註』）をテキストとして、何よりも原文を読むことを基本としている。その上で、それぞれの専門分野を通しながら、課題の検討・共有を行っている。『浄土論註』の研究は、これまで親鸞の視点を通した『浄土論註』へのアプローチが主流であったが、本研究会では『浄土論註』そのものに引用・参照されている『維摩経』『華厳経』などの思想との関連性をたずね、さらに親鸞以前の『浄土論註』研究という点も視野にいれている。

研究の進捗状況は、十二月二十九日の研究会を終えた時点で、『浄土論註』巻上の輪読と検討を終了し、『浄土論註』巻下の検討に入っている。今後、これらの研究会の成果は、学会等で発表し、『浄土論註』研究の進展に寄与できればと考えている。

## 「近代戦争下の学術調査と人的交流」研究会

藤井由紀子

メンバー：藤井由紀子・中川剛・花栄・日比野洋文

本研究会は、立ち上げ当初、日本近代における戦争と学問との関係を具体的に考究することを目的とし、戦争下で学術調査に携わった研究者たちの記録の発掘と、その調査分析とを主な活動内容としていく予定であった。

ところが、周知のごとく、第五波、第六波とつづくコロナウイルスの影響により、十分な調査が行えない状況が現在も続いている。

そこで、本年度は研究会発足の契機となった西蔵寺蔵「小川貫弌資料」を見直し、手元に蓄積されたデジタル画像と調査データを活かして、「コロナ禍下での資料共有方法の構築」というテーマを設け、資料撮影、画像データ管理など、メンバーがこれまでに携わってきた作業を通し、それぞれの立場から意見交換を重ね、資料公開の方向性について模索することを行った。

なお、そこに至る経緯については『同朋大学仏教文化研究所紀要』第四〇号に掲載している。

## 「日本仏教の成立と展開」研究会

（活動継続中）

## 教行信証学習会

吉田　暁正

講師：森村森鳳（張　偉）先生
趣旨：漢文として『教行信証』を読む
会場：同朋学園Ｄｏプラザ閲蔵２Ｆ　多目的会議室
テキスト：東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）
開催日：11／25　1／20　2／24
＊以下の日程は、緊急事態宣言発出による対応として中止となった。
5／27　6／24　7／29　9／16

『教行信証』の読解において、親鸞が言葉の中に込めたメッセージを確かめるように学習を進めている。特に、親鸞の言語表現、文字への厳密さに注目して読むこと、また、その表現の中に込められている重層的な意味を読み取ることを意識しながら読解を進めている。

昨年度に引き続き、「信巻」における「王舎城の悲劇」について学習を進めている。今年度は、開催日が少なかったため、理解を深めていく上で、参加者からの質問を通して「仏陀」、「悪人」、「宿業」など、重要な用語についての確認を行った。

一つ一つの言葉を丁寧に尋ねつつ、学習を続けたい。

# 二〇二一年度彙報

《研究所構成メンバー》

所　　長　安藤 弥
所　　員　箕浦尚美（人文学科）　岩瀬真寿美（社会福祉学科）
　　北島信子（社会福祉学科）
所員・幹事　市野智行（仏教学科）
研究顧問　小山正文　小島惠昭　蒲池勢至　玉井 威
所員（非常勤）　千枝大志　川口 淳
客員所員　青木 馨　飯田真宏　塩谷菊美　大山誠一　大艸 啓
　　岡村喜史　花 栄　北畠知量　ギャナ・ラトナ
　　黒田龍二　嘉木揚凱朝　脊古真哉　新野和暢　武田 龍
　　服部 仁　藤井由紀子　藤村 潔　ブレニナ・ユリア
　　松金直美　松山 大　吉田暁正　吉田一彦
客員研究員　老泉 量　川村伸寛　周 夏　高木祐紀　中川 剛
　　日比野洋文
特別研究員　木全琢麿　小谷峻示

《所員会議》

4／20　5／18　6／15　7／20　9／14　10／26
11／9　12／7　1／18　2／14

《公開講座等》

・現地で学ぶセミナー…　前期・後期とも今年度は中止

《ギャラリー史料展示》（会場＝DOプラザ閲蔵一階ギャラリーDO）

・前期（6／18～7／2）〔担当〕安藤弥
「三河大浜騒動一五〇年」
※オンライン展示解説（本編・特別編）もリリース
・後期（11／19～12／3）〔担当〕安藤弥
「真宗寺院の聖徳太子絵伝―《聖徳太子》一千四百五十年忌記念―」
→今年度もコロナ状況下、前期は学内関係者のみの観覧制限となったため、オンライン展示解説を併せて実施。後期は事前申し込み制で学外観覧者の受け入れを実施した（オンライン展示解説は不作成）。いずれも学芸員課程履修学生・教員の協力を得た。

《史料調査活動》

・真宗寺院史料調査
7／16～18　本誓寺（真宗大谷派・岩手県盛岡市）＊継続調査
8／1　福念寺（真宗大谷派・愛知県豊田市）＊予備調査
9／17　浄明寺・善徳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県瑞穂市）
10／25　唯法寺（真宗大谷派・愛知県西尾市）
11／29　浄林寺（真宗大谷派・岐阜県垂井町）
12／14　一乗寺（真宗興正派・愛知県幸田町）
2／1　真宗高田派名古屋別院（真宗高田派・名古屋市）
・寄託史料の整理調査（養念寺ほか）
・学園史関係資料の再確認

《特別活動・備考》

・初期真宗研究会の開催（11／3　12／22　3／17）
・研究所所蔵フィルム史料のデジタル化作業
・アーカイブズ関連実習
・くずし字解読学習会の実施（学芸員課程履修学生希望者対象）
・展示ケースの再整備
・随時、研究所への学術的来訪・打診へ対応